

## 保育のヒント～「科学する心」を育てる～

カメ～子どもの気づき 保育者の気づき～／学校法人錦秋学園 錦秋幼稚園（東京都）

みなさんの園では、どのような生き物を飼っていますか？

今回は、園で飼育しているカメに関わる子どもたちの姿に焦点を当てている事例をご紹介します。

「興味をもってよく観察しているからこそその気づき」「カメとカラスの命を守るために考える」など、子どもたちの姿から、「科学する心」の育ちが伝わってきます。保育者は、子どもたちの視点に立って、思いや気づきを受け止めたり、出来事を園全体で共有するための工夫をしたりしています。



### ● カメさんをカラスから守りたい／3歳児～5歳児

#### ✦ 場面1：カメの足跡発見！（4歳児）

7月上旬、子どもたちが、外に出ているカメを見に来た。自分たちの足の下を歩いて通る所（カメトンネル）を見ているとカメが歩いた後に足跡が付いていることを見つけた。



Aさん：「カメの足跡！」

保育者A：「カメさんの足跡、どんなだった？」

Aさん：「ネコみたいだった」

Bさん：「爪が長くてネコみたいな爪」

Cさん：「これ、カメの足跡だよ」

保育者A：「カメさん、爪があるんだね」

Dさん：「しっぽの足跡もあるよ。先生、カメはしっぽも引きずって…カメさん歩いているから、しっぽの足跡もあったよ」

保育者A：「へー。カメさんは、しっぽを引きずっているから跡が付くんだね」（と、子どもたちの気づきを受け止める。）

その後Dさんが、歩いているカメを見て、カメの足を指さしながら、「とんがっているの爪だよ」と言う。保育者Aは、「とんがっているのは爪なんだ。お友達にも教えてあげて」と、受け止めて伝える。Dさんは、「爪だよー！」と、周りにいるみんなに声をかける。子どもたちは、カメの足を改めて見に行く。「反対の足が出ていないよ、るるちゃん（小さいカメ）の所」「足が引っ込んでいる」など、数人でカメを見ながら足の様子を話していた。

Dさんが保育者と一緒に、職員室に置いてあるミニ図鑑でカメのページを開き、るるちゃんの様子と見比べていた。図鑑に同じカメが出ていることを見つけじっくり見ていた。その後、遊びの中でカメの絵を描き、その場にいなかった子どもたちにも様子を伝えていた。

保育者の  
気づき

カメとの関わりが増え、足跡やしっぽの跡に気づいたことでカメの足を改めて観察し、図鑑を見るなど、カメの生態に目を向けるようになった。さらにその発見を友達に伝え、共有していた。描かれたカメの絵を見ると、足やしっぽが表現されており、足跡やしっぽについての気づきが学びになっていたと考えられる。

## ✦ 場面2：事件発生！！カメのるるちゃんがカラスに連れていかれた！

6月下旬の夕方、カメ用のタライにかけてあった網が緩んでいて、るるちゃんがカラスに連れていかれてしまった。園庭の真ん中にいたカラスを職員が発見し追い払った。るるちゃんが死んでしまったのではないかと心配したが、無事に生きていたという出来事があった。早速この事を、「錦秋ニュース」で子どもたちに伝えた。

「錦秋ニュース」とは園全体で共有したいことがあった時に、アナウンサーがニュースを読む風に、昼食時に放送で子どもたちに伝えることを不定期で行っているもの。



### ● ”錦秋ニュース”を聞いた後

#### 4歳児

Bさん：「そんなことがあったなんて……かわいそう」

Cさん：「涙が出そう……」

Dさん：「先生、カメちゃん、どんなだった？」

保育者B：「先生が見たときは、C先生やD先生たちが助けた後だったけど、手も足も甲羅の中に入って動かなかったよ。お水に入れて、しばらく待っていたらちょっとだけ動いたんだよ」

Eさん：「どうしたらカメを守れるかな？」

Fさん：「カラスをやっつける！！」

Gさん：「それじゃー、カラスもかわいそうじゃん」

Eさん：「網がちゃんと掛かってなかったのがいけない！ 網をぐるぐる巻きにしたほうが良いよ」

Hさん：「檻を作った方がいいよ！」

保育者B：「そうしたら、カメさん出られないよ。みんなも遊べないよ」

Hさん：「それはだめだ！じゃあ、違う方法を考えよう！」

それぞれ、近くにいる友達と一緒にいろいろな方法を考えたり、カメの話をしたりしていた。

#### 5歳児

その日のうちにカラスを守る方法をクラスで話し合った。子どもたちは、その結果を紙に書いた。「カラスに餌をあげる。そして、帰ってもらう」「テープをはって、跳ね返す」「チェックをする（カラスがきていないか）」「カラスをつける」「網をかぶせる」

そして、紙にお化けやカメを描いたり、紙を丸めて真ん中に石を入れて目玉を作り、カラスが見て逃げていく物などを考えたりして、タライの周りに貼り付けた。



#### 3歳児

この事件が伝わり、「なぜ、カラスに連れていかれたのか」と疑問に思い自分なりに考え心配したり、カメをよく観察したりするなど、さらに興味を深めていく姿が見られた。

#### 保育者の気づき

カラスがカメを食べようとしたことを実際に見てはいないが、その時のカメの気持ちを想像して、自分の気持ちやこれからカメを守るための考えを友達と話し合い、一緒に考えていた。カラスがカメを食べようとした事件を子どもたちに話すことで、カラスを悪者として「カラスを倒す！」「やっつけてやる！」という気持ちばかりが強くなってしまわないかと懸念していたが、子どもたちの会話の中から「カラスもかわいそう」という言葉が聞かれ、カメもカラスも命があり、大切にしようという気持ちが育まれていることに改めて気づいた。

## ✦ 場面3：カメちゃんけがしている?! 4歳児・5歳児

7月下旬、夏休みに入り、預かり保育の子どもたちが登園してくる中でもカメをカラスから守ろうとする活動は続いていた。ある日、るちゃんの絵を描きながら、子どもたちから、カメがどこに住んでいるのかが話題になる。Aさんが、「カメは海大好きだから」と、図鑑を持ってきて、カメのページを見始めた。



Aさん：「草カメだね」

Bさん：「あごのところに模様があるよ」

Cさん：「爪は4本」

子どもたちは、実際に見ようとカメを持ち、ひっくり返してお腹を見ると足に赤いできものができているのを見つける。「どうしたんだろー」「石でガリッってしたんじゃない?」と、心配している。保育者が「どうする?」と尋ねると、「絆創膏、貼ってあげたら?」「かわいそうだね」「痛いかなあー」などと、友達と話している。

Bさん：「わかった! カラスにちょっと食べられたんじゃない?」

保育者A：「そうかな? でも、最近、あんまりカラス来てないみたいよ。みんながカメを守ろうって絵とか貼ってあるからじゃないかな」

Aさん：「最近、ハトが来ているよね」

Cさん：「カメちゃん、休ませてあげよう。寝ていた方がいいよ。お薬飲んで、寝た方がいいよ」

保育者A：「そうだね。じゃあ、そうっとしてあげよう」

周りの子どもたちも「そうだね」「そうっとね」などと口々に言い、心配そうに見ている。

Cさんが、「ベッド作ってあげたら? フワフワの入れるの!」

保育者が「フワフワってどんなの?」と聞くと、タオルのことだった。保育者が持って来たタオルをCさんが触ってみて「これ、あんまり、フワフワじゃないよ。先生、もっとフワフワなタオル持ってきてあげて!」と言うので、保育者は、もっと柔らかいタオルを再度取りに行く。Cさんが再び触って、「これならいいよね」と、納得し飼育ケースに入れてベッドにする

### 保育者の気づき

カラスからカメを守る案は、現実的なものが多かったが、カメに絆創膏や薬など人間と同じような対応を考えている姿もあった。カメを自分たちと同じ仲間としての愛情や思いやりの気持ちをもっているからこそ、このような言葉が出てきているのではないかと感じた。今後さらに、カメへの探究が深まる過程で、カメの生態を知り、生き物の視点に立った関わり方や飼育環境を、子どもたちが考えていくことを願っている。カメが海にいるというイメージが強く、図鑑やテレビで見た経験から海という言葉が発せられたのではないと思われる。今後、子どもたちの興味に応じて、近隣の池や川などにいるカメを実際に見に行くなど、カメの生態への探究につながる保育の工夫も必要だと感じた。

## ✦ 保護者への発信

本園では、保護者に不定期に発信しているお便り「てくてく」と、ドキュメンテーションの形式でのクラス便りがあり、保護者にも子どもが楽しんだり悲しんだり、心を動かしていることを伝え、保育への関心を深めるきっかけとなってほしいという願いで取り組んでいる。この「てくてく」でカメの事件や子どもたちがカメたちを守るために考えてくれたことを保護者に伝えた。

